

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第186号

イザヤ 65:1

平成23年3月25日

人の子よ。イスラエルの山々に預言して言え。イスラエルの山々よ。主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。敵がおまえたちに向かって、『あはは、昔からの高き所がわれわれの所有になった。』と言っている。それゆえ、預言して言え。神である主はこう仰せられる。実にそのために、おまえたちは、回りの民に荒らされ、踏みつけられ、ほかの国々の所有にされたので、おまえたちは、民の語りぐさとなり、そしりとなった。それゆえ、イスラエルの山々よ。神である主のことばを聞け。神である主は、山や丘、谷川や谷、荒れ果てた廃墟、また、回りのほかの国々にかすめ奪われ、あざけられて見捨てられた町々に、こう仰せられる……おまえたちが諸国の民の侮辱を受けているので、わたしはねたみと憤りをもつて告げる……おまえたちを取り囲む諸国の民は、必ず自分たちの恥を負わなければならない。だが、おまえたち、イスラエルの山々よ。おまえたちは枝を出し、わたしの民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが帰って来るのが近いからだ……おまえたちは耕され、種が蒔かれる。わたしは、おまえたちの上に人をふやし、イスラエルの全家に人をふやす……わたしはおまえたちのところに、昔のように人を住ませる。いや、以前よりも榮えさせる。このとき、おまえたちは、わたしが主であることを知ろう……わたしは、二度と諸国の民の侮辱をおまえに聞かせない。おまえは国々の民のそしりを二度と受けてはならない……

エゼキエル書 36 : 1- 15

2011年3月11日、先例のない東北関東大震災（マグニチュード9.0）は多くの尊い生命を奪い、世界中を震撼させました。生命以外のすべてを一瞬のうちに失った被災者の方々の精神的、身体的苦痛を量り知ることは到底不可能ですが、この地震は世界中のキリスト者の祈り、人々の愛の奉仕、あらゆる手段の援助を被災地に向けました。今、世界中が、地震、津波という人には不可抗力な天災によってもたらされた人災、福島県の原子炉破壊による被爆、環境汚染の恐ろしさをかたずをのんで見守っています。冒頭のメッセージのように、神ご自身の民イスラエルに恐ろしい災いをもたらされたのが神ご自身で、同じ神がそれに倍増する祝福をももたらすと約束されたのなら、一実際、神の預言の多くはすでにイスラエル史において見事に成就したのです—が、日本に起こった大惨事も神の視点から、祝福への第一歩と捉えることができるかもしれません。日本は唯一の被爆国で、第二次世界大戦以来、平和憲法を擁護して来ました。キリスト教国と名乗る国々をも含め世界中の国々が人を殺すための核兵器を造り、自国残存政策をとっている一方で、核兵器製造、徴兵制度を拒否し、核を平和のためだけに用いてきた唯一の国、日本が今、再び被爆の脅威にさらされるような事態に至ることを神が許されたということには、大きな神意があるに違いないのです。

戦後六十五年を過ぎた今日、戦争の悲惨さを知らない若い世代はこの平和憲法破棄、改正を主張し続けており、日本に平和憲法を締結させた米国も日本の対外的軍事行動がこの憲法によって束縛されていることに不快感を示し、圧力をかけ続けている今日、神は、核戦争の恐ろしさを、平和利用の原子力発電所の維持さえ未知数で危険であることを教えることによって、世界中に語っておられるのではないのでしょうか。生命線供給のための発電所さえ打たれ、このような危機感にさらされるのであれば、神が授けられた生命を奪う核兵器の使用がどんなに恐ろしい、予想のつかない災禍をもたらすかは言うまでもありません。中東に目を移しますと、イスラエルが平和協定を結んでいたエジプトの動乱、政権打倒で、イスラエルが孤立化した直後、核兵器を満載したイランの軍艦二艘が三十年にして初めてスエズ運河を通ってレバノンに送られ、イランが新たにイスラエル撲滅の意思表示をしたことにより、中東での核戦争の危機がにわかに取りざたされ始めました。その矢先に、まさにこの絶妙なタイミングで、日本の福島原発の被爆問題が持ちあがったことは偶然でしょうか。人間文明が人間自身を滅ぼすことになるとの神のメッセージではないのでしょうか。

これから世界に起ころうとしている、神を否定する者、神の御旨に従わない者の上を下る裁きの「始まり」、—そのときには、エゼキエルが悲しくも預言したように、悪者だけでなく、正しい者の上にも同じ裁きがかかるのです—が、日本から始まったとしたら、劇的な救いも日本から始まると期待できないのでしょうか。ひとりでも多くの者の救いを願ってやまない憐れみの神が日本をこのように無惨に討たれたとしたら、そこには神の遠大なご計画、一災いを通して日本人たちの霊の目が開け、真の神を信じる国民に変えられる—があるはずで、先に神の救いに与っているキリスト者は、今こそ声を大にして同胞の永遠の救いのために執り成しの祈りをささげようではありませんか。

イザヤ書、エゼキエル書、ダニエル書はじめ聖書の預言書は、終末の末期の「主の日」に向けて起こる中東戦争を預言しています。エゼキエル書は、33章から48章にかけて、イスラエルの復興の預言を記しており、38、39章は、キリストの再臨による究極的な復興が起こる前、「ハルマゲドンの戦い」の前に勃発する「ゴグ、マゴグの戦い」を詳細に描いています。マゴグと同盟軍が北方からイスラエルを侵略し、エルサレムが戦場となるこの戦いには核兵器が用いられるであろうこと、究極的には神がイスラエルを守られ、ゴグが自滅すること、戦渦からの復興、国土の聖めに七ヶ

月が費やされることが記されていますが、同時に、サタン、墮天使、悪霊の関わる戦いであることも暗示されています（詳細は『[一人で学べるエゼキエル書](#)』補注6参照）。「マゴグ」は「ヤペテ」の子孫で、ギリシャ名では『スキタイ人』、また七世紀 BCE の南ロシアのことともみなされ、マゴグの子孫は、十世紀 BCE から三世紀 BCE にかけて、南ロシアのウクライナから中国の万里の長城まで一帯を支配したのです。地理的にイスラエルの真北は今日のトルコ、ロシアであり、注釈者の多くがロシアを北方からの侵略軍とみなしています。この侵略軍の同盟国の筆頭は「ペルシャ」で、他に挙げられている名は今日のイラン、エチオピア、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタリア、アルメニアに関連づけることができます。イランの原子炉建設を援助したのはロシアで、今日、イスラエル撲滅を明白に宣言している核保有国イランが、中東に第三次世界大戦を起こそうとしていることは、だれもが認めることです。

この「ゴグ、マゴグの戦い」が過去のイスラエル史でまだ起こっておらず、今すぐにも起こり得る侵略戦争を指し示していることは多くの点で裏づけられます。エゼキエル書 38、39 章で言及されている「**城壁のない町々**」は町が城壁で囲われることが当然であった古代には考えられず、したがって今日への言及であること、「**久しく廃墟であったイスラエルの山々**」にユダヤ人が住み始めたのは十九世紀末で、捨て置かれ不毛の地と化していたパレスチナに灌漑用水を引き、有数の野菜、果物の輸出国になるまでに国土を緑化し始めたのは二十世紀になってからであること、イスラエルが「**一つの国**」、国家として復興したのは 1948 年であること、ユダヤ人の世界各地からの本国帰還が今世紀に入って加速化していること、中東で石油のない国として不思議がられていたイスラエルに、数年前レバノンとの境の沖合、イスラエルの地に膨大な天然ガス、石油が埋蔵されていることが発見され、昨年確認されたことにより、近隣のアラブ諸国、特にレバノンがロシアとの提携で海底油田の所有権争いに乗り出したことなど、「**銀や金を運び去り、家畜と財産を取り、大いに略奪をしようとする**」という預言を満たす条件がそろったことなどが挙げられます。また、イスラエルを攻める侵略軍に対し、イスラエルが核の応報をすることで、「**その日には必ずイスラエルの地に大きな地震が起こる。海の魚も、空の鳥も、野の獣も、地面をはうすべてのものも、地上のすべての人間も、わたしの前で震え上が(る)**」と神が宣言された大惨事が起こることが推し量られます。まさに仲間割れに象徴されるサタンの王国は本質的に立ち行くことができないとキリストが言われたように、大混乱の中で侵略軍は同士射ちの混乱に陥り、大軍勢の上に「**ねたみと激しい怒りの火**」、神の裁きが下るのです。神が敵を自滅させられた後、イスラエルの地では核戦争の惨禍、残骸と死体の事後処理が七年もかけて専門家の手で慎重に行われ、イスラエルの地はついに聖められることとなります。

神がこのような惨事が起こることを許されるのは、諸国民にイスラエルの神の栄光、力、裁きを認識させる御目的のゆえです。冒頭に引用した 36 章は「ゴグ、マゴグの戦い」の前後のイスラエルの地の描写です。神がアブラハム、イサク、ヤコブの子孫イスラエルに与えると四千年前に約束された地が諸国民に奪われ、分割され、偶像崇拜の地として汚されてきたことに対する神の怒りが爆発する日、すなわち、諸国民が裁かれる日が預言されています。「ゴグ、マゴグの戦い」を通して神の偉大なるご介入を見たイスラエルはヤーウェに立ち返ることになりますが、おそらく同時進行で「反キリスト」と「偽預言者」が頭角を現し、「擬似メシヤ信奉」体制を導入し、サタンの最大のだましの手段を総動員してユダヤ人、クリスチャン、諸国民をかつてない欺瞞におとしめることになるでしょう。中東戦争での大混乱が世界中に報道されれば、世界中の人々は二度と核戦争の悲劇が起こらないようにと、間違いなく平和を求めるようになります。思想、宗教、民族、文化、価値観等の違いから生ずるいがみ合いが二度と起こらないために、全世界が一つの政府、司法、経済、通貨、宗教、文化の下で統治されることが理想的に思え、人々は、混乱の全地を平和裏に治めることのできるカリスマ的な指導者を切実に求めるようになるのです。

預言者エゼキエルが復興のビジョンの中で究極的に訪れることを預言した「メシヤの時代」、一神のアブラハムへの約束の完全な成就—は、この世からサタンの影響を一掃しないかぎり実現することのない神の支配される理想的な王国です。したがって、最初の人類の墮落以来、人間史の背後で神の御働きを妨害してきたサタンとその手下ども—墮天使、悪霊—と、これらサタンの体制に加担する者たちがもはや人々に影響を与えることができなくさせられる何らかの手段が講じられなければならないのです。そのために神は、サタンが「擬似メシヤ信奉」体制をこの世にもたらしことを許されます。あたかも平和をもたらす者のように登場し真のメシヤに成りすます、この世の最後に現れる「反キリスト」は、人間史のどの時代にも現れ、自らキリストであると豪語してきた多くの者たちのことではなく、聖徒ですらだまされるような超能力を行使するネフィリムのような超人間のことです。サタンの体制がもたらす前代未聞の恐ろしい欺瞞で地上の人々の判断力が鈍らされないうちに、聖書の警告に耳を傾け、その先にある神の確かな約束を信じ、鋭い洞察で今を正しく見極め、生きることは、信者、未信者に関わらず、取り返しのない事態に陥らないためには不可欠です。終末の末期に起こることは、天の御使いが現在「**引き止めている**」力を神のご命令によって除くとき、加速度的に進行しますから、あっという間に手遅れになってしまうのです。世界各地で紛争、天災、人災が相次ぎ、人々の関心がこの世の事象に捕われている今日、サタンとその手下どもは超自然的な現象「**大きなしるしや不思議なこと**」で人々の注目をひき、欺瞞体制への下準備を着々と進めています。人々が矢継ぎ早に起こる予測できない惨事におびえ、心を悩ませこの世に絶望するとき、地球外からの救いであるかのように印象づける現象が起きれば人々は盲目的にすべてを受け入れてしまうでしょう。反キリストはそのような形で登場するのです。